

## 看護教師の質を高めるための現任教育 (第3報)

## ——研究委員活動——

山本 君子, 大堀 昇, 吉田久美子, 田山 友子  
峰村 淳子, 朝比奈佳志子

key words : 看護基礎教育, 看護教師, 現任教育, 研究委員会

## I. はじめに

看護基礎教育の充実に向け、各教育現場では2009(H21)年のカリキュラム改正のための準備が進められている。今回のカリキュラム改正は、2007(H19)年4月付けの「看護の基礎教育の充実にに関する検討会」の報告書<sup>1)</sup>(以下、検討会、および報告書)が公表されたことによる。報告書には、「看護をめぐる環境は、急速な少子高齢化の進展、医療技術の進歩等大きく変化してきており看護職員にはより患者の視点に立った質の高い看護の提供が求められている」とし、看護基礎教育で対応する必要性が背景にあることが示されている。カリキュラム改正は、今回で4回目となるが、1997(H9)年の改正から10年以上経過しており、特に新人看護職員の臨床実践能力の低下に対し早急な対応が必要とされている。

2007(H19)年10月に出された指導要領改正案では「専任教員は、専門領域における教授方法の研修や、看護実践現場での研修を受けるなど、自己研鑽に努めること」とされている。これからの看護教師は、看護基礎教育に携わる者として以前にも増して資質の向上を目指す必要がある。

本校では、現任教育の一環として看護教師の教育実践能力の育成を目指し、研究委員を中心に活動を行っている。その活動経過については、2001(H13)年度まで報告されており<sup>2)3)4)5)</sup>、今回は2002(H14)年度から2007(H19)年度までの活動状況について報告する。

## II. 教師教育の理念と研究委員会の役割

本校は3年課程の看護専門学校であり、15名の看護教師(教育経験:平均9年1ヶ月)が在職している。教師教育の理念は、「個人を尊重し創造性のある調和のとれた教員をめざす」ことであり、目標は、「(1)社会人としての教養を養う。(2)教育者としての教育の本質・対象・方法について学び、教育実践できる能力を養う。(3)看護に関する基本的な考え方をもち、看護能力を主体的に高める努力をする。」の3点である。これらの推進のために、研究委員会が設置され、現在4名で教師の現任教育に関する研究・研修活動の企画・運営・推進の役割を担っている。

主な役割は、三つの研修計画と支援である。まず看護学教育の質の向上をめざし、日常教育活動を研究的に取り組むための、教員研修、事例検討会、公開授業である。二つ目は、研究報告を行うための、各種学会・学術誌等への発表支援、紀要発刊である。三つ目は、新任教員の教育計画立案と自主学習の支援である。

## III. 現任教育の実際

教員研修・授業研究・紀要発刊についての目的・方法、2002(H14)年度以降の活動経過及び評価について、下記に示す。

## A. 教員研修

## 1. 夏期・春期教員研修

本校の教員研修は、約35年以上の歴史がある。スタートは、教員の自主的な学習活動より発足した経緯

から「自主研修」と称した研修と、「夏期・春期研修」との2本立てだった。その後、それらの研修を合併し「教員研修」と称している。2001(H13)年以前の研修経過は、すでに報告されているため参照されたい<sup>2)3)4)5)</sup>。

教員研修の進め方は、テーマを決定し、全体討議とグループディスカッションの流れである。テーマによっては、外部講師を招き学習会を取り入れ、より一層の効果を期待することもある。個々の教員は、教員研修を通して学んだことを、日々の教育活動に活かせるように心がけている。

#### 1) 目的と方法

教員研修の目的は、「教育活動に研究的に取り組み看護教育の質の向上をめざす」ことである。具体的なテーマは、アンケート調査等で教員の意見を取り入れながら年間計画として毎年決定している。方法は、年2回、夏と春に2～3日の集中研修である。

#### 2) 経過 (表1参照)

毎年教員に対して行っているアンケート調査の結果をもとに、教員会議でテーマの検討を行う。本校の教員が要望しているものを取り入れているが、希望の多くは近年の看護や看護教育の現状・動向に即したものである。最終調整を研究委員会で行いテーマを決定し具体的な計画を行っている。この5年間の主なテーマは看護倫理教育に関すること、教育活動に関する自己点検・自己評価やカリキュラム改正に向けての検討であり、学校全体として取り組む必要のある内容であった。研修の時期・テーマ・目標等については表1を参照されたい。

#### 3) 内容

##### ○企画及び方法について

毎年、各教員へのアンケート調査で教員の要望を確認しテーマを決定して企画することが定着してきている。

研修期間は、2～3日で行っている。夏は宿泊研修としており、職場を離れての研修であるため集中して取り組むことができ、各教員の理解や解釈など共有することができ意識統一につながっていている。

##### ○研修内容

2002(H14)年度と2003(H15)年度は、看護基礎教育における看護倫理教育について行った。まず看護基礎教育における看護倫理教育の基本について講師を招き理解を深めていった。そして、本校のカリキュラムにおける看護倫理教育の実情を、教員全員で把握し、専門領域の看護学における倫理教育の検討課題を

見出した。また各教員からの実践報告をもとに意見交換を行い、学びの共有とともに、カリキュラム及び科目ごとの課題を見出し、今後の教育内容を具体的に検討した。その後、より倫理教育を発展させた「ケアの倫理」について外部講師を招き学習を深めた。講義内容は、事例を活用して看護を語る(ナラティブ)重要性や看護を受ける対象の最善の利益という視点であり、教育実践に基づいた「ケアリングとケアの倫理」が強調されていた。

2004(H16)年度は、教育評価の目的のために、2003(H15)年7月25日に看護師養成所等に関する自己評価指針作成検討会で作成された資料を活用し、評価表の作成に取り組んだ。教員5名が一つのグループとなり、授業評価表の案を作成し、パイロットスタディを行った。結果をもとに授業評価表の完成にむけて検討を重ねていった。

2005(H17)年度の夏期研修は、看護基礎教育のカリキュラム改正が予想される中で、本校の教育カリキュラムに向けての検討を行った。具体的内容は、外部講師を招きケアリングカリキュラムについての理解を深めることができた。春期研修では、引き続き、ケアリングの視点の教育を踏まえて、実習病院の指導係りを学校に迎え、効果的な臨地実習教育にむけての検討を行った。

2006(H18)年度の夏期研修では、本校のカリキュラム改正に向けて取り組んだ。具体的な内容は、教育理念の構想の原点である卒業生像について、教員間の共通認識をするために「本校はどのような学生を育てたいのか」について検討した。これらのことを踏まえ、春期研修は、東京医科大学病院の看護部主催である慈恵医科大学病院の副看護部長による「フィッシュ!哲学」の講演に参加した。

#### 4) 評価及び今後の課題

企画及び方法は、教員の関心が高い、タイムリーなものとなっているため積極的に取り組んでいた。主に「看護倫理教育」「教育活動における自己点検・自己評価」「カリキュラムの検討」などのテーマが続き、本校のカリキュラムや各科目の教育内容、個人の教育手法に至るまで幅広く検証することができた。

研修内容は、2002(H14)年度と2003(H15)年度の看護倫理教育についての講義を通して、各教員は自分の専門領域に関連させて考えることができた。時を同じくして日本看護協会による「看護者の倫理綱領」が発表され全体会やグループワークによって、本校の

表1 夏期・春期教員研修の経過

年度	期	期間	テーマ	目標・方法	講師
2002 (H14)年度	夏期	8/3・ 8/26～8/28	看護基礎教育における看護倫理教育	目標①本校の看護倫理教育の現状と課題を知る。②看護基礎教育における看護倫理についての理解を深める。③倫理的感性を育てる。1日講師より講義を受けた。次に3日間かけてグループワーク・全体会を通して理解を深めた。	坪倉繁美 厚生労働省看護研修センター 主任教官
	春期	3/10・3/11	看護基礎教育における看護倫理教育	1日目は講師を招き、グループワークと全体会を交えて、講師より判断力や倫理観を育てる看護倫理の具体的な方略の示唆を得た。2日目は数名の専任教員の実践報告を受け意見交換をして学びの共有をし、今後のカリキュラム及び科目ごとの課題を見出した。	坪倉繁美 厚生労働省看護研修センター 主任教官
	夏期	7/31・ 8/25～8/27	看護基礎教育における看護倫理教育	目標として①本校の教育理念・教育目標を看護に照らして検討する。②本校の看護基礎教育における看護倫理教育の到達目標を明らかにする。③ケアの倫理についての学習を深め倫理的感性を育てる。④看護倫理教育のカリキュラムの検討に必要な情報を得る。第1回は講師より「ケアリングとケアの倫理教育」をテーマに講義を受け全体討議をした。第2回はグループワーク・全体会を通して目標達成をした。	筒井眞優美 日本赤十字看護大学 教授
2003 (H15)年度	春期	2/27	看護基礎教育における看護倫理教育	倫理観を養う看護基礎教育について本校の今年度の教育実践状況を知り今後に活かした。また「看護基礎教育における看護倫理教育」に関する2年間の教員研修の成果を概観し、今後の発展について考えた。	
	夏期	8/23～8/25	本校の教育活動に関する自己点検・自己評価	「看護師養成所の教育活動等に関する自己評価指針」等をもとに、自己評価に関する認識を深め、本校の教育活動に関する自己点検・自己評価の計画（自己評価の範囲、基準、時期）を立案した。	
	春期	2/21・2/22	本校の教育活動に関する自己点検・自己評価	目標として夏期研修内容を踏まえて①パイロロットスタデイの結果を基に「本校における授業の自己点検・自己評価表（仮）」の妥当性、活用性を検討し、完成させる。②授業評価を中心にして本校の実施要領（案）を検討し完成させる。を掲げてグループワークと全体会を通してまとめた。	
2004 (H16)年度	夏期	8/22～8/24	本校のカリキュラム改正に向けての検討	目標として①ケアリングカリキュラムについての共通理解、意識づけができる。②本校のカリキュラムの現状分析が出来る。③ケアリングの視点から臨地実習のあり方を検討出来る。を掲げてグループワークと全体会を通して深めた。	安酸史子 福岡県立大学看護学部 学部長
	春期	3/2・3/3	効果的な臨地実習の教育に向けての検討	臨地実習指導における現状を相互理解し、よりよい連携のもとでの効果的な臨地実習教育の方向性を見出すため、指導係と教員の合同研修を行った。	宮崎歌代子 東京医科大学病院 副看護部長
2005 (H17)年度	夏期	8/21～8/23	東京医科大学看護専門学校のカリキュラム・看護モジュールの検討	看護基礎教育のカリキュラム改正が予想される中で、本校のカリキュラムの見直しの第一歩として教育理念の見直しをしていく。特に教育理念構想の原点は「本校においてどのような卒業生を送り出そうとしているか」にあるため、本研修においては変化を促す社会状況、社会ニーズ、教育機関の特性、看護専門職の動向から、看護界の現状と課題を理解しながら、卒業生像について教員間の共通認識をしていった。	
	春期	3/3・3/15	魅力ある学習環境・職場環境を「フイッシュュ！哲学」から学ぶ	「フイッシュュ！哲学」の原理を学び、学生がイキイキと看護を学び、実践してゆくためにはどのような教員のサポートが必要なのか、教員もイキイキと看護教育を実践していくために何が必要なのか理解する。講義で「フイッシュュ！哲学」の原理を理解し、その後アイスカッションで原理を基に魅力ある学習環境や職場環境とは何かを検討した。	大水美名子 東京慈恵会医科大学附属病院 副看護部長

教育理念・教育目標の検証や学生へ教授内容・方法の検討を行った。その結果、実習ガイダンスの内容・教育方法や各講義科目の授業内容などの強化もでき、教育実践に速やかに反映された。2004(H16)年度の授業評価表の完成にむけて検討を重ねたことにより、教員の意識の統一とともに個々の授業や実習指導の振り返りにつながり、どのような視点で評価項目や尺度を設ければ良いのが考えられた。2005(H17)年度の夏期研修ではケアリングカリキュラムの講義を通し、ケアリングが複雑多様化している現代社会の中で健康と癒しを促進する関わりであることが分かった。ケアリングを意図的にカリキュラムに結び付ける必要性や教育方法との関係性も理解できた。さらに、講義だけでなく臨地実習においてもケアリングを踏まえた経験型実習教育が必要であることも気づくことができた。引き続き、春期研修でケアリングの視点の教育を踏まえ、実習病院の指導係りと検討会を設けたことにより臨床との連携の大切さを再確認できた。2006(H18)年度の夏期研修で本校のカリキュラム改正に向けて「本校はどのような学生を育てたいのか」を検討したことにより、「卒業生像」のキーワードを挙げることができた。その項目は、早期離職防止のために知識・技術はもとより、思いやりやユーモアを持ち、コミュニケーション能力があるなどであった。春期研修で「フィッシュ!哲学」の講演に参加したことにより、学生が「イキイキ」と看護を学び、実践していくために教員がどのようなサポートができるか。また教員も看護教育実践を「イキイキ」としていくために何が必要かを学ぶことができた。

今後の課題は、教員研修での学びを、カリキュラム改正のための検討時に役立てることである。

## B. 授業研究

授業研究は、臨地における授業（臨地実習指導の事例検討）と学内における授業（公開授業）に分けて研究活動を行っている。

### 1. 事例検討会

臨地実習は、看護基礎教育課程の統合的役割と、学内における教育との相補的役割を果たす科目群であり、学びの宝庫でもある。近年、看護も教育も「個への関わり」としての考え方が重要視される時代になっている。このような中で、教員が実習指導を通して学生の関わりについて検討することは意義深いものである。

### 1) 目的と方法

目的は、「授業（臨地実習）における学生との関わりへの振り返りを通し自己の教育観を育成する」ことである。教員の経験年数等は様々であるが、教員として教育の本質を理解する事と、メンバーと共に教育方法や問題解決の仕方を学び共有していく中で、自己の感情や思考をありのままに表現する事や傾聴がねらいである。これらのことから教員自身の自己理解に繋がっていく。

方法は、各教員が、年間で実習経過や問題を紙面で1事例ずつ計5～6回を提示し、グループ内で分析・検討する。内容は、学生との関わりで教員自身が気になっている事や困った事などである。その際、事例を口外しないことを基本的姿勢としている。終了後は事例提供者を中心に、明確になったことや自己の課題等を整理し各リーダーが年間のまとめを行っている。

### 2) 経過

2002(H14)年以降も以前と同様、1グループあたり4～5名の教員とし、3グループ編成で行った。各グループで検討された事例は、学生（自己中心的、自己防衛が強い、感情コントロールができない、不安が強い、マナーが悪い、インシデントが多い、コミュニケーションが図れないなど）との関わり方、臨地実習病院の指導係との調整などが主であった。

### 3) 評価及び今後の課題

複数の教員で客観的に見つめ直すことで、学生の多様化する生活背景や学習状況を理解する大事な機会となった。そのような学生を統合的・全人的に捉えることで一方的ではない、視野を広げて教育することの大切さを学んだ。また気になる学生に対し、継続的に関わる事の重要性を学ぶことができた。更に改めて学生との関わり方の難しさを知り、多角的な視点からのアプローチの必要性や指導の方向性を見出すことができた。そして教員のマンパワーだけでなく、臨地指導係やスタッフとの協力や調整の必要性も学べ、更には他の教員の教育的関わりから自分の関わりを振り返り、指導観・看護観に触れ自己成長する機会となった。

このように、事例検討会の場合は、学生理解や教育方法の学びだけでなく、教員自身の悩みや相談の場となり気持ちの整理に役立っている。また専門職になる学生を育てるという意識を高めていける場にもなった。この事例検討会で継続的かわりを必要とするような場合は、学生指導委員会や実習担当者にこの学びを共有することができた。グループ人数は、意見交換がし

やすかったため、妥当であると思われる。

事例検討会を通して教員が得た学びから、今後の課題を以下のようにまとめる。

- ①学生の思いを表出させ、受けとめ、そこから看護に結びつけるよう学生のレベルに合った指導をする。
- ②学生だけではなく、教員自身も変えていくことで、個々の学生に応じた教育を行う。
- ③看護者、専門職者として学生とともに成長していくよう努力していく。
- ④個々の教員が学生への良い環境因子の一つになれるよう関わっていく。
- ⑤自分自身と意識して向き合う勇気と成長しようとする努力が必要である。
- ⑥事例検討による学びを共有し、継続指導に繋げていく。

・事例検討会による教員の学びを、かつては、研究的に取り組むこととしていたが、倫理的問題を考慮し2006(H18)年以降から研究委員の役割から除外した。

## 2. 公開授業

### 1. 目的と方法

公開授業は、「①授業（講義・演習・校内実習）を実

施し、自己・他者評価を行うことで、より客観的に自己の授業を振り返る。②公開授業の気づきや発見を今後の教育活動に生かしていく」を目的に、教育実践能力の育成を目指している。毎年4月の最初の教員会議で公開授業実施希望者と参加希望者を募り、教員各自が自主的参加という形をとっている。毎年、3～9名の実施者がいる。また本校では毎年7人前後の教育実習生の受入れを行っており、指導担当教員の授業見学や教育実習生の授業参加を実施している。

### 2. 経過（表2参照）

各年度のテーマと主な内容は、表2の通りである。

### 3. 評価及び今後の課題

実施後の評価や意見交換は、2000(H12)年度研究委員会が提示した「評価の視点」となる評価表の活用、アンケートや口頭での感想・意見交換を行うなど、実施者が希望する方法で行うことを前提に参加者にも了承を得ている。このように実施後の評価方法を自由に行っていることは、実施者も参加者も過度に構えることがない利点がある。

2002(H14)年度には、「公開授業実施者の心得」と「公開授業参加者の心得」<sup>5)</sup>を決定した。このことにより、公開授業を行う際の最低限のマナーを明確にで

表2 公開授業の経過

年度	月	授業科目	方法と「単元」
2002(H14)	6月	看護方法論Ⅱ	講義「輸血」
	7月	小児看護学Ⅱ	講義「慢性期にある小児の看護」
	9月	老年看護学Ⅱ	講義「ターミナル期の看護」
		小児看護学Ⅱ	講義「小児ターミナル、白血病の看護」
	11月	成人看護学Ⅰ	講義「生活習慣病予防」
		母性看護学Ⅰ	講義「思春期」
		成人看護学Ⅱ	講義「大腸癌の手術を受ける患者の看護」
		看護方法論Ⅳ	講義「不安の看護」
12月	看護方法論Ⅰ	講義「入院、退院」	
2003(H15)	5月	看護方法論Ⅱ	校内実習「筋肉内注射」
	9月	小児看護学Ⅱ	校内実習「小児看護技術」
	10月	看護方法論Ⅰ	講義「感染予防の基礎理論」
2004(H16)		看護方法論Ⅰ	校内実習(3回)・京都中央看護専門学校の教員3名が見学
	5月	老年看護学Ⅰ	講義「パーキンソン病患者の看護」
2005(H17)	11月	看護方法論Ⅰ	校内実習「足浴(陰部洗浄)」
		母性看護学Ⅰ	講義「性教育、月経教育」
		成人看護学Ⅱ	講義「甲状腺摘出術を受ける患者の看護」
2006(H18)	4月	看護方法論Ⅲ	講義「看護過程の展開」
		看護方法論Ⅲ	講義「看護過程の展開」
	6月	看護方法論Ⅲ	講義「看護過程の展開」
	9月	看護方法論Ⅲ	講義「看護過程の展開」

き, より意味のある公開授業として徹底を図ることができた。

公開授業を通して, 実施者からは参加者の感想やアドバイスを有効で多くの気づきがあったことや, 次への授業への取り組みに活かすことができたという意見があった。また授業の展開方法, 教員の姿勢や工夫, 学生の反応など多くの示唆を得ることができたなどの意見も聞かれた。しかし, 参加教員数は, 1回あたり2~3名であり, 決して多いとは言えない。それは, 教員のほとんどが臨地実習に行っていたり, 同時間に他の授業を担当していたりと物理的制約の中においてやむを得ないと考えられる。

今後の課題としては, 教員一人一人の授業の質の向上を目指すためにも, 参加者が多くなるよう働きかけていくことが必要であり, 年間のカリキュラムに公開授業を組み込むなどの検討も考えられる。

2001 (H13) 年から関連校への公開授業参加の案内を試みていた。2年間の交流はなかったが, 2004 (H16) 年に「京都中央看護専門学校の教員3名が基礎看護学の公開授業に参加した。授業後の意見交換では, 「是非自分たちの看護学校でも活用したい授業内容であった」との大変喜ばしい感想を頂いた。今後も, 他校の状況を配慮し関連校との交流を深めていきたい。

### C. 紀要発刊

#### 1) 目的と方法

本校の紀要の発刊は, 「看護教育の質の向上を目指すために, 日常の教育活動を研究的に取り組み, その結果を紀要にまとめる」ことを目的としている。

投稿資格は, 投稿規程により本校専任教員, または本校紀要編集委員会が執筆を依頼した者としており, 発刊作業は紀要編集担当者が規定に則り行っている。

研究の進行にあたっては, 2002 (H14) 年度から国際医療福祉大学大学院教授である湯沢八江先生にご指導をお願いしており, 指導希望者は研究計画書の作成から指導を受けられるようにしている。また原稿の査読も湯沢八江先生にお願いし, 厳しい中にも温かい導きのある審査を頂いている。

#### 2) 経過 (表3参照)

本校では1990 (H2) 年6月に第1巻を発刊して以来, 2007 (H19) 年の第17巻まで, 毎年継続して発刊している<sup>1)2)</sup>。

2003 (H15) 年の第13巻から2007 (H19) 年の17巻までの5巻における掲載数は, 各々6題, 6題, 6

題, 6題, 8題となっている。投稿者は本校専任教員が主であり, 個人投稿, グループ投稿すべてをみると全員が1回以上 (1~7回, 平均約4.3回) 投稿している。

2006 (H18) 年の第16巻からは, 本校3年次における授業科目「看護研究」での学習成果として, 看護学生の論文を1~2題載せることとした。選考は, 副学長, 教務主任, 研究担当教員, 研究委員が行っている。

これまでの掲載内容は, 学内での授業 (講義, 校内実習) と臨地実習, 倫理教育, 医療事故, 自己点検・自己評価, 就職前教育, 海外研修報告など多岐に渡っている。

#### 3) 評価及び今後の課題

看護専門学校において1990 (H2) 年の創刊以来17年間毎年, 継続発刊できたことは本校専任教員の努力の成果である。過去5年間における掲載題数が毎年6題以上, また専任教員全員が投稿していることは評価に値すると思われる。しかしながら, 1巻あたりの投稿題数が6題というのは決して多いとはいえない。これは前回までの報告<sup>1)2)</sup>においても懸念されてきたことであるが, 現状はそれほど変化がない。また教員により投稿回数の差があることも含め, さらなる投稿への推進を図っていくことが今後の課題の一つである。日頃の教育活動や日常業務と並行しての研究活動は時間的な制約が大きいため, 早期から研究活動に取り組んでもらえるよう関わっていく必要があると考える。具体的には「研究報告をするための計画と支援」(表4)のスケジュールに従って進めていけるよう, 時には前年度からの働きかけも必要と思われる。

2006 (H18) 年の第16巻から本学3年生の論文を載せることにしたことは, 学生達の研究に取り組む意欲に影響を与え始めていると感じている。

掲載内容として特に自己点検・自己評価は, 看護専門学校における今後の実施義務化に向けて早期から取り組んだ内容であり, 常に最新の看護教育情勢を意識しながら, 質の高い教育を目指して活動していることを反映していると思われる。

近年, 他の看護専門学校でも紀要の発刊が盛んになっている。研究活動は教師としてはその専門性を高めるためにも重要である。まずは自己研鑽の意味でも自主的に取り組むことが期待される。委員会の役割としてはそれが可能となるよう, 前述の課題に取り組む支援していくことが必要であると考え。また一人で

表3 「紀要」発刊の経過

巻(発刊年)	テ ー マ	分 野・分 類
第13巻 (2003年)	本校の「地域看護学」の成果と今後の課題 —学生による学習内容の自己評価結果と実習の満足度の分析を通して—	地域看護学
	看護学生の精神障害(者)に対する理解の変化(第1報) —3年次精神看護学実習前後の変化—	精神看護学
	授業研究① —小児看護学Iの授業に対する学生の評価	小児看護学
	就職前教育についての卒業生からの評価 —「既卒者からのアドバイス」と「看護技術練習」を試みて—	学生指導委員会
	看護教師の質を高めるための現任教育(第2報) —研究委員会活動報告—	研究委員会
	デンマークとスウェーデンの在宅ケア(訪問看護・継続看護)の実態 —大川記念奨学基金による視察研修参加報告—	その他
第14巻 (2004年)	施設内看護師の在宅支援の看護についての研究(第3報) —認識・行動の実態と影響要因分析を通じた看護教育への一提言—	地域看護学
	在宅看護のイメージ化への校内実習の効果 —ロールプレイング終了後のアンケート分析を通して—	地域看護学
	小児看護学実習における学習結果とインシデント・アクシデントの実態(その1)	小児看護学
	医療事故に対する看護学生の意識	その他
	就職後9ヶ月経過した卒業生による就職前教育の評価と辛い時期の対処方法	学生指導委員会
	1年生の「臥床患者のシーツ交換技術発表会」への取り組みと評価	基礎看護学
第15巻 (2005年)	『看護者の倫理綱領』に関する授業評価 —看護学生が考える『看護者の倫理綱領』の重要度と授業に対する満足度	成人看護学
	成人看護学実習Iの授業評価	成人看護学
	本校における科目の構成と教育内容	カリキュラム検討委員会
	本校における看護倫理教育 —2001年～2004年度における検討経過及び実践報告—	倫理教育検討委員会・研究委員会
	カナダB・C州の看護学生海外研修報告	科目外活動
	「第10回 英国アロマセラピーとホスピス研修」参加報告 —大川記念奨学基金による研修—	その他
第16巻 (2006年)	本校学生の学生生活の実態その3 —2005年生と1998年生との比較—	その他
	臨地実習における看護学生のとらわれの意味 —E. Wiedenbachの「看護上の出来事の再構成」を手がかりとして—	その他
	本校における母性看護学実習 —2000年度～2005年度における検討内容と実践報告—	母性看護学
	小児看護学実習におけるインシデント・アクシデントの実態(その1)	小児看護学
	老年看護学におけるオムツ着用体験学習の効果	老年看護学
	看護学生の結婚・出産・育児・および就業に関する意識調査 —一般女子大学生の意識調査文献との比較—	看護学生
第17巻 (2007年)	本校の自己点検・自己評価委員会の活動経過報告	自己点検・自己評価委員会
	学生による2005(平成17)年度授業評価の結果報告	カリキュラム検討委員会
	臨地実習における看護学生の思考変容の過程 —「看護上の出来事の再構成」による演習を通して—	その他
	就職を控えた学生の就職に対する不安の変化と意識の高まり —先輩看護師の体験談を聞いて—	学生指導委員会
	看護学生の高齢者に対する意識の変化 —老年看護学Iの講義前後の質問紙調査分析を通して—	老年看護学
	看護学生がとらえている摂食障害に対する認知と自助グループの活動に対する意識 —「第8回NABAフォーラムが開催される」の記事を通して学んでいること—	精神看護学
	震災時救援活動に対する看護学生の意識調査	看護学生
看護学生が抱くストレスの原因とその対処方法 —本校学生の実態調査—	看護学生	

表4 研究報告をするための計画と支援

月	項目	手順
4月	紀要掲載内容の検討	①過去の内容を考慮に入れ検討(継続性・発展性を持たせるため)し, 研究委員会で概要を検討する ②指導講師(査読講師)への依頼 ③教員会議で投稿を募集
5月	紀要申込書締め切り	①年度紀要掲載希望分まで受け付ける
6月	特別寄稿の先生への交渉・依頼	①読講師への謝礼金の依頼
7月	掲載予定者発表 必要書類配布	①掲載予定者に執筆依頼文書を配布する
8月	計画書指導依頼 計画書締め切り 掲載論文の検討	①画書を指導講師に届け, 指導を受ける(面接, 郵送, Eメール) ②申込書・計画書をもとにして研究委員会で検討する
11月	草稿締め切り 草稿読み合わせ 執筆者へ草稿返却	①研究委員会で草稿を読み合わせる ②執筆者に原稿を依頼する
12月	原稿締め切り 原稿読み合わせ 編集作業	①研究委員会内で原稿を読み合わせる ②編集作業～査読依頼 ・掲載順の検討・決定 ・目次・表紙の下書き ・提出原稿のレイアウト見直し(必要時, 執筆者に体裁の修正依頼) ・写真・図・表・資料等の挿入箇所確認
1月	原稿・封筒等の印刷依頼 校正1 校正2 発送先確認	①指定の印刷所へ必要数を依頼 ②表紙右上に国際標準逐次刊行物番号の印刷を依頼する ・著者校正を依頼する(初校は執筆者が行う) ・校正は誤植にとどめ, 新たな加筆・修正は原則として受けつけない ③研究委員が分担して行う ④下地模様・網掛け・写真の挿入・表紙・完成予定日の確認 ⑤全国看護系学校名簿を参考に確認しておく
2月	完成紀要受け取り及び発送	①院内・学内配布該当者への配布 ②学外配布該当施設への発送依頼 ③研究論文投稿者への配布 ④学校保管用紀要の保存

も多くの教員が紀要だけでなく, 学会発表, 専門雑誌への投稿なども出来るよう支援していくことである。

研究は, 研究過程を学ぶことも重要である。そのためには, 研究計画書の作成から指導を受けることが必要であるが, 指導教員である湯沢先生の活用がされていないのが現状である。要因として考えられることは, 研究への取り掛かりが遅いことではないだろうか。今後の課題の二つ目として, 研究計画書作成の段階から指導を受けられるよう, 数ヵ年単位での計画を立て, 早期の段階から個別に働きかけていくことが必要であると考え。

#### IV. 全体評価

2002 (H14) 年度から2006 (H18) 年度までの現任教育は, 教員研修, 授業研究, 紀要発刊を行った。

教員研修については, 要望しているものを取り入れ, テーマを決定していることは近年の看護や看護教育の現状・動向に即したものであり効果的であった。

また宿泊研修は, 職場を離れての研修であるため集中して取り組むことができ, 各教員の理解や解釈など共有することができ意識統一につながっていている。

授業研究については, 学生理解や教育方法の学びだけでなく, 教員自身の悩みや相談の場となり気持ちの整理に役立っている。また他校との交流の機会ともなった。

紀要発刊については, 看護倫理, 自己点検・自己評価などその時機に合ったものが投稿されている。しかし, 1巻あたりの投稿題数が増えていないこと, 教員の投稿の差があること, 研究指導者の活用がされていないことなどの課題も多い。

浜田は看護教師について, 「看護の専門における科学的な知識・技術を身につけるとともに, 科学的な思考力・判断力を養い, 自律性に富んだ看護実践のできる能力を育成する直接的な担い手であり, 看護の質を左右する重要な鍵を握る存在」<sup>6)</sup>と定義づけている。

看護基礎教育の充実を図るためには, 看護教師の質



的向上が必要であることは言うまでもない。しかし、多忙な日常の教育活動や業務を振り返り、「私は教師に向いていないのではないか」「私の授業で学生の学びはあったのだろうか」など自問自答し自信を無くしてしまうこともあるのではないだろうか。看護教師に求められる能力は限りないが、個人の素養と努力では難しいのが現状であると考える。看護教師が教育経験から学びを得るのは、学生であり、教師仲間である。現在実施している本校の公開授業、事例検討会、春・夏期研修は教師としての危機を乗り越える機会ともなり教師としての成長への一歩ともなり得ると考えている。

#### V. おわりに

教師が成長するためには、物的環境と人的環境が大きく影響すると思われる。教師の成長のために環境を整える役割が研究委員会であると考えている。しかし、多忙な業務の中で環境を整え、能力開発のための企画や支援を行うことは、難しいことが多く試行錯誤の連続である。このような現状であるが、同じ組織で働く仲間が、お互いの支えになりそして成長していくためにも、研究委員の役割を継続し、計画や支援内容をさらに創意・工夫をしていくことが課題である。僅

かながらではあるが、研究委員の活動によって、本校の教師が、自らの教育実践から学び続ける力を、より一層増していけることが願いである。

#### 引用・参考文献

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会。報告書, 厚生労働省, 2007.
- 2) 黒坂知子, 吉岡敏子. 教師の質を高めるための現任教育の試み。—事例によるミーティング・自主研究を中心に—。東京医科大学看護専門学校紀要. **2**(1), 16-24, 1991.
- 3) 吉岡敏子, 黒坂知子. 教師現任教育の試み(第2報) —看護教員研修(春・夏)を中心に—。東京医科大学看護専門学校紀要. **3**(1), 53-63, 1992.
- 4) 長田京子, 天野雅美他. 看護教師の質を高めるための現任教育—研修・研究活動報告—。東京医科大学看護専門学校紀要. **8**(1), 41-48, 1998.
- 5) 峰村淳子, 山田雅子他. 看護教師の質を高めるための現任教育(第2報) —研究委員会活動報告。東京医科大学看護専門学校紀要. **13**(1), 39-47, 2003.
- 6) 浜田悦子. 看護教師教育における教育課程の現状と問題点—1年コースの看護教育施設における比較分析を中心に—。日本看護科学雑誌. **5**(1), 8-48, 1985.